



スポーツトレーニングについて分かりやすく指導するハート・オブ・ゴールドの「スポーツ大使」

チャリティーマラソンから 始まった支援

カンボジアが誇る世界遺産、アンコールワットを走り抜ける。1996年から毎年開催されている「アンコールワット国際ハーフマラソン」は、世界中のランナーに人気のルート。内戦の負の遺産としてこの国の人々の生活を影を落とす地雷の製造・使用の禁止を訴えることを目的に、エントリー費用などが地雷被害者の自立や義手義足製造といった支援などに寄付されるチャリティーマラソンだ。

その運営を支援しているのが、岡山を拠点とするNPO法人ハート・オブ・ゴールド。設立したのは二人のオリリンピック女子マラソンメダリスト、有森裕子さんとニュージールランド元代表のローレン・モラーさん。「アンコールワット国際ハーフマラソン」の第1回、第2回大会に出場したことをきっかけに、「スポーツを通じて誰かの役に立ちたい」との思いを共有した二人が、この大会の継続を目指して共同で立ち上げたのだ。

「こんなに暑いのに、どうしてマラソンなんて走るの？」
当時、カンボジア国内での反応はその程度。しかし、ハート・オブ・ゴールドはカンボジア側の実行委員会の運営能力を高めるべく、現地の人々と協働で当日の運営のほか資金調達や広報などの支援に取り組んできた。その結果、第1回では14の国・地域から654人だった参加者は回を重ねるごとに増え、昨年の第16回には58の国・地域から5230人が参加。多くの地元ランナーも誕生し、この大会で育った選手が国際大会に出場するまでになった。「現地の人々が主体的に大会を運営できるまでに成長してくれました」と、ハート・オブ・ゴールド東南アジア地域事務所の山口拓さんは話す。

子どもたちのために 「体育」を変える

「アンコールワット国際ハーフマラソン」の支援を続けるうちに「輪」が広がり、ハート・オブ・ゴールドの活動は広がりを見せる。その転機となった

世界中からランナーが参加する。障害者に向けたコースもあるアンコールワット国際ハーフマラソン



PLAYERS

国際協力の担い手たち

NPO法人 ハート・オブ・ゴールド

マラソンを出発点に “輪”を広げる

開発途上国でスポーツを通じた国際協力に取り組むNPO法人ハート・オブ・ゴールド。マラソン大会の運営や体育授業の改善など、カンボジアを舞台に活動の場を広げている。



ハート・オブ・ゴールド設立のきっかけとなり、運営支援を続けているアンコールワット国際ハーフマラソン

のは、アンコールワットのあるシエムリアップ州のスポーツ課と01年から開催していた「スポーツを通じた青少年指導者育成の祭典」だった。

1年目は、スポーツ大使として日本の有名選手が現地の子どもたちと一緒に参加するスポーツ大会だったが、2年目にはカンボジアの若手スポーツ指導者を対象にトレーニング法を伝える人材育成にフォーカス。そして3年目には教育省スポーツ局との共催となり、ハート・オブ・ゴールドのスタッフ、日本からのスポーツ大使、両国の学生ボランティアが教育省の職員と国内を巡回して指導方法を普及したり、クメール語で作成された各種スポーツのルールブックや指導法マニュアルを配布する活動などに発展した。

この支援が評価され、ハート・オブ・ゴールドは06年からJICA草の根技術協力事業を通じて、筑波大学と連携し「カンボジア小学校体育科指導書作成支援」事業を実施することになった。

カンボジアには、体育を通して何を教えるか教育目標や指導内容がまとめられた体育科の指導要領がな



授業に取り入れる競技や指導方法を工夫し、子どもたちが楽しみながら参加できる体育になった

った。また、教育関係の行政官も体育教員も体育の授業を受けた経験が、ゼロで、一部の教育関係者を除いて、体育教育の重要性が理解されていない。そこで、教育省の行政官や学校教師とともに教育目標や指導内容を検討し、体育科の指導要領と教員用の指導マニュアルを作成することに。「何度も何度も話し合い、内容を検討する果てしない作業でした」と山口さんは振り返る。

その苦労が実を結び、完成したのが体育指導要領と指導法マニュアルだ。指導要領では、学年ごとに身体技能の発達やチームワークの順守など保健体育の目的が掲げられ、低学年には鬼ごっこなど体を使った遊びやボール遊び、高学年には基本運動や球技などを取り入れてスポーツの意義を伝えるといった指針がまとめられている。

この成果を受けて、09年からはJICA草の根技術協力事業「カンボジア小学校体育科振興プロジェクト」を通じて、作成した指導要領の内容に沿った授業が広まるよう、教育省行政官や体育教員などを対象に講習会を実施。教育省の職員を「ナシヨナルトレーナー」として育成し、彼らが全国の小学校や教員養成校で指導している。

「体育が楽しくて仕方がない！」
新しい体育の指導法が取り入れられた小学校では、そんな生徒の声が聞かれる。整列など集団行動を学ぶだけの時間から、楽しく多様なことを学べる時間に変ったのだ。できる人が、できることを、できる限り取り組む。ハート・オブ・ゴールドのモットー。マラソン大会や体育授業の改善などの支援を通じ、これからは国際協力の「輪」を広げていく。



ハート・オブ・ゴールドの支援で作成された小学校の体育の指導要領